令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業
（地域課題対応支援事業）

「みんなのキンビ」プロジェクト

令和５年度　実施報告書

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会

Index [もくじ]

はじめに …… 3

「みんなのキンビ」プロジェクト概略と組織図 …… 4

Ⅰ　～であう・まなぶ・つながる～「みんなのキンビ」プロジェクトについて …… 7
(1)概要 …… 7
(2)活動実績 …… 8

Ⅱ　しかける～「みんなのキンビ」ネットワーク構築事業 …… 9
(1)「みんなのキンビ研究会」 …… 9
(2)キンビコミュニケーター養成 …… 12

Ⅲ　うごかす～地域との協働アートプロジェクト「みんなのキンビ展」 …… 15
(1)特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」 …… 15
(2)鑑賞支援ツール「さわってみる絵」の作成 …… 31
(3)学校との連携 …… 34

Ⅳ　のこす～記録映像及び報告書の制作～ …… 38

Ⅴ　ふりかえる～評価とフィードバック～ …… 39

Ⅵ　今後に向けて（成果と課題） …… 40

要綱 …… 42

あとがき …… 45

はじめに

「みんなのキンビ」プロジェクトは、秋田県立近代美術館を中核に多様な主体が連携・協働する3年計画の事業です。本事業は、年齢や障害の有無等にかかわらず美術を通じて人々が出会い、ともに学び合える場を創造することで、「障害者の生涯学習」の促進や地域のつながりづくり、地域活力の向上などに寄与することを目的としています。

本プロジェクト1年目となる令和5年度は、文化庁の「Innovate MUSEUM」事業にも採択され、美術、教育、福祉、産業技術などの様々な分野の方々と連携・協働し、「みんなのキンビ研究会」の開催、「キンビコミュニケーター」養成、特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」などを実施しました。特に特別展開催にあたっては、障害のある方へのアクセシビリティの向上を図るとともに、視覚だけによらず、様々な感覚を通して鑑賞する「さわってみる絵」などを作成する、新たな試みを行いました。これらは、県内外で活躍する作家や障害のある方、県内有数のデザイン会社、映像制作会社、各種学校など、多くの方々からのご協力があって初めて実践できたものです。あらためて本事業の推進にご支援、ご協力いただいた皆さまに、この場をお借りし御礼申し上げます。

近年、急速に変化する社会において、公共施設としての美術館にはどのような社会的役割が求められているのかが問われています。「みんなのキンビ」プロジェクトとして秋田県立近代美術館を中核とした連携・協働は始まったばかりではありますが、美術を介して様々な人が出会い、学び合い、つながりあう場の創造を通し、これからの美術館が担う社会的役割の方向性を示していきたいと考えております。

本冊子は令和5年度の実施事業を報告するものです。ぜひご高覧いただき、多くの方に「みんなのキンビ」プロジェクトを知っていただく機会となることを願っております。

令和6年3月

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会
会長（秋田県立近代美術館・館長）　佐藤　哉子

～であう・まなぶ・つながる～「みんなのキンビ」プロジェクト

目的

秋田県立近代美術館を中核に多様な主体が連携・協働し、年齢や障害の有無等にかかわらず、美術を通じて多様な人々が出会い、ともに学び合える場を創造することで、「障害者の生涯学習」の促進や地域のつながりづくり、地域活力の向上等に寄与することを目的とした事業である。

学　校

小学校、中学校
義務教育学校
高等学校、特別支援学校等

専門機関

NPO法人アーツセンターあきた
NPO法人アートリンク うちのあかり
秋田県産業技術センター

行　政

秋田県
秋田県教育委員会

つながる
であう
まなぶ

- 美術を介して人・地域をつなぐキンビコミュニケーターの養成
- 様々な感覚をとおして味わう鑑賞機会の創出
- 共生社会・社会包摂への気運の醸成
- 美術館を核とした地域の多様な課題の解決、まちづくりへの参画

美術館

秋田県立近代美術館

令和5年度

みんなのキンビネットワーク構築事業

- 近代美術館を中核とした、多様な主体との連携・協働によるシンクタンク「みんなのキンビ研究会」
- 「キンビコミュニケーター」の養成

【地域との協働アートプロジェクト】
みんなのキンビ展Ⅰ
テーマ：からだじゅうであじわう

- 市民参画によるワークショップ型展覧会Ⅰ
- 五感であじわうことをテーマとした展覧会の開催

令和6年度

みんなのキンビネットワーク構築事業

- 多様な視点による地域課題解決を目指した、教育機関等との連携

【地域との協働アートプロジェクト】
みんなのキンビ展Ⅱ
テーマ：いっしょにつくる

- 市民参画によるワークショップ型展覧会Ⅱ
- 普段交流する機会の少ない人たちがアートを介することで出会い、つながる展覧会の開催

令和7年度

みんなのキンビネットワーク構築事業

- 企業との連携による取組の充実及びその発信による共生社会、社会包摂への気運の醸成

【地域との協働アートプロジェクト】
みんなのキンビ展Ⅲ
テーマ：みんなのおまつり

- 市民参画によるワークショップ型展覧会Ⅲ
- 様々な機関・施設でのアートイベントの実施

「みんなのキンビ」プロジェクト 組織図

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会（●事務局　秋田県立近代美術館）

●NPO法人アーツセンターあきた●NPO法人アートリンクうちのあかり●秋田県産業技術センター
●秋田県立栗田支援学校●秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校●秋田公立美術大学附属高等学院
●秋田県教育庁生涯学習課

協　働

●みんなのキンビ研究会
●NPO法人エイブル・アート・ジャパン
「みんなでミュージアム」担当チーム
（文化庁委託事業　令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業）
●絵画作家　永沢 碧衣氏

助　成

●文化庁　令和5年度InnovateMUSEUM事業

みんなのキンビネットワーク構築事業

●みんなのキンビ研究会
●NPO法人エイブル・アート・ジャパン
「みんなでミュージアム」担当チーム
（文化庁委託事業　令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業）

地域との協働アートプロジェクト

特別展「からだじゅうで あじわう　大根ビネーション展」

企画・トータルディレクション●澁谷デザイン事務所
展示協力●ココラボラトリー
協力（展示順）●高性寺（五城目町）●柳澤龍（合同会社　運動）
●AAREA(能代市)●東京農業大学
●ナッツとドライフルーツのお店　木能実（能代市）
●平川慧（能代市）●安藤郁子（秋田市）
●高橋希（オジモンカメラ｜秋田市）●長浜谷晋（秋田市）
●鄭伽耶（小宇宙感光｜五城目町）●三上健太郎（秋田市）
●柚木恵介（秋田公立美術大学｜秋田市）●多賀糸尊（横手市）
●草薙デザイン事務所（秋田市）
●秋田協同印刷株式会社（秋田市）
●株式会社アウトクロップ（秋田市）
●田口康平（T-FARM|大仙市）
●黒崎平（秋田市）●劇団わらび座（仙北市）
●鈴木百合子（羽場こうじ茶屋 くらを｜横手市）
●船橋陽馬（根子写真館｜北秋田市）
●根子集落の方々（北秋田市）●Dai-Com-ASHIモデルの方々
●横手市農林部食農推進課　園芸拠点センター
●横手市立大雄小学校●秋田県立横手支援学校
●雄物川郷土資料館（横手市）

本書は「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会による「～であう・まなぶ・つながる～『みんなのキンビ』プロジェクト」の、令和5年度の取組の成果報告書である。本事業並びに本書の発行は「令和5年度Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受け発行した。

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会

会長	佐藤哉子	秋田県立近代美術館・館長
副会長	藤　浩志	NPO法人アーツセンターあきた・理事長 秋田公立美術大学・教授
役員	中田善英	秋田県教育庁生涯学習課・課長
役員	安藤郁子	NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事 秋田公立美術大学・教授
役員	内田富士夫	秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・部長
実行委員	瀬川　侑	秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・研究員
実行委員	綾瀬アデルジャン	秋田県産業技術センター　電子光応用開発部・主任研究員
実行委員	佐藤美幸	秋田県立栗田支援学校・教諭
実行委員	田口朋美	秋田県立横手清陵学院高等学校・教諭
実行委員	岸上恭史	秋田公立美術大学附属高等学院・教諭
事務局	木村雅洋	秋田県立近代美術館・学芸班長（兼）学芸主事
事務局	保泉　充	秋田県立近代美術館・主査（兼）学芸主事
事務局	福田裕奈	秋田県立近代美術館・主任
事務局	北島珠水	秋田県立近代美術館・学芸主事
オブザーバー	森川勝栄	秋田県教育庁生涯学習課・主任学芸主事

I ～であう・まなぶ・つながる～
「みんなのキンビ」プロジェクトについて

(1) 概要

～であう・まなぶ・つながる～「みんなのキンビ」プロジェクトは、秋田県立近代美術館を中核に多様な主体が連携・協働し、年齢や障害の有無等にかかわらず、美術を通じて多様な人々が出会い、ともに学び合える場を創造することで、「障害者の生涯学習」の促進や地域のつながりづくり、地域活力の向上等に寄与することを目的とした事業である。

令和5年度の事業内容は以下のとおりであり、文化庁「Innovate MUSEUM事業」の助成を受け実施した。

●しかける～「みんなのキンビ」ネットワーク構築事業

◎シンクタンク機能を有する「みんなのキンビ」研究会による課題共有と、課題解決に向けた方策等の立案・提言
◎美術で人と地域をつなぐ「キンビコミュニケーター」の養成

▲うごかす～地域との協働アートプロジェクト

◎市民の参画による特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」の開催
◎3Dプリンター等による鑑賞支援ツールの共同開発
◎多様な交流活動、多彩なワークショップの企画・開催

■のこす～記録映像作品の制作

◎映像による活動の記録

◆ふりかえる～評価とフィードバック

◎実行委員会の開催（①「計画の策定と目標の共有」、②「評価とフィードバック」）
◎成果発表、アンケートの実施

〈当館及び関連機関の役割〉

秋田県立近代美術館[中核館] ……プロジェクト全般の渉外事務、事業の進行管理、調整企画・人材の育成・実践の支援
NPO法人アーツセンターあきた［学術研究・高等教育］ …… スキームの提言、プロジェクトの協働
NPO法人アートリンクうちのあかり［障害者の生涯学習］…… スキームの提言、プロジェクトの協働
秋田県産業技術センター［技術改善・開発支援］ ……スキームの提言、鑑賞支援ツールの開発
各学校［美術による異校種交流］…… 共生社会志向の気運醸成、鑑賞支援ツールの開発、ワークショップの企画・実践

(2) 活動実績

●しかける ▲うごかす ■のこす ◆ふりかえる

令和4年(2022)		[場所]
12月 7日(水)	▲第1回鑑賞支援ツール「さわってみる絵」検討会	[秋田県産業技術センター]
12月23日(金)	●「みんなのキンビ」情報交換会	[秋田市文化創造館]

令和5年(2023)		[場所]
6月16日(金)	▲第2回鑑賞支援ツール「さわってみる絵」検討会	[秋田県産業技術センター]
8月 6日(日)	▲「きっずあーと　おさかなすいぞくかん」	[秋田県立近代美術館]
8月22日(火)	◆第1回「みんなのキンビ」実行委員会	[秋田県立近代美術館]
8月23日(水)	▲第3回鑑賞支援ツール「さわってみる絵」検討会	[秋田県産業技術センター]
9月23日(土)	●第1回「キンビコミュニケーター」養成講座	[秋田県立近代美術館]
10月 4日(水)	▲第4回鑑賞支援ツール「さわってみる絵」検討会	[秋田県産業技術センター]
10月21日(土)	●第2回「キンビコミュニケーター」養成講座	[秋田県立近代美術館]
10月28日(土)	▲「みんなのキンビ展」作家交流会	[秋田県立近代美術館]
11月11日(土)	▲特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」 ～2024年1月28日	[秋田県立近代美術館]
	●第1回「みんなのキンビ研究会」	[秋田県立近代美術館]
	●第3回「キンビコミュニケーター」養成講座	[秋田県立近代美術館]
11月18日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ1 「心も体もポッカポカ『ん?ほほ～あっ!わぁ♫じーん』 からだじゅうであじわう表現ワークショップ」	[秋田県立近代美術館]
11月25日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ2 「永沢碧衣さんとroot painting project」	[秋田県立近代美術館]
12月 9日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ3 「キンビコミュニケーターワークショップ 『みる』『きく』『さわる』一緒に楽しむ鑑賞会」	[秋田県立近代美術館]
12月16日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ4 「おしゃべり鑑賞会」	[秋田県立近代美術館]
12月23日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ5 「クリスマスカラーでつくってみよう」	[秋田県立近代美術館]

令和6年(2024)		[場所]
1月 6日(土)	●第2回「みんなのキンビ研究会」	[秋田県立近代美術館]
	▲大根ビネーション展ワークショップ6 「うちのあかりワークショップ」	[秋田県立近代美術館]
1月13日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ7 「雪のキャンバスお絵描きワークショップ」	[秋田県立近代美術館]
1月27日(土)	▲大根ビネーション展ワークショップ8 「大根ビネーション展大収穫祭」	[秋田県立近代美術館]
2月 9日(金)	◆第2回「みんなのキンビ」実行委員会	[秋田県立近代美術館]
	●第3回「みんなのキンビ研究会」(講師の諸事情により中止)	[秋田県立近代美術館]
2月25日(日)	●第4回「みんなのキンビ研究会」	[秋田県立近代美術館]

Ⅱ しかける
「みんなのキンビ」ネットワーク構築事業

(1)「みんなのキンビ研究会」の実施

シンクタンク機能を有する「みんなのキンビ研究会」を3回実施した。秋田県の抱える課題を含め、美術館を取り巻く実情について、アートや福祉、教育、産業技術など、様々な分野の方と共有し、今後の美術館の在り方やプロジェクトが向き合うべき課題について検討した。

【第1回みんなのキンビ研究会】

日　時　令和5（2023）年11月11日（土）14：30～16：00

講　師　NPO法人アーツセンターあきた理事長　秋田公立美術大学教授　藤 浩志氏

テーマ　「みんなの美術館とは　今を生きるために美術館はどうあるのか」

参加者　18名

対　象　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員及び「みんなのキンビ展」関係者

内　容　「みんなのキンビ」実現に向け、美術館を拠点としながら公民館を含めた機関と連携していくシステムについて、また多様な価値にアクセスできる環境やしくみづくりについて、先進的な取組の紹介とともに参加者同士がそれぞれの立場で意見交換をした。また、「文化芸術は豊かさのためのものか」という藤氏の問いかけのもと、「アートを必要としている切実な人」とどうつながるか、「見えないものを見ようとする力、想像する力」について参加者同士が意見交換した。

▲それぞれの立場で意見交換

▲藤氏の講演

【第2回みんなのキンビ研究会】

日　時　令和6（2024）年1月6日（土）13：30～15：00

講　師　秋田公立美術大学教授・NPO法人アートリンクうちのあかり代表理事　安藤郁子氏

テーマ　「美術館だからできること　アートを介した対話による出会いの場をつくるということ」

参加者　9名

対　象　一般

内　容　自己紹介と共に「大根ビネーション展」で感じたことなどを話すという活動からスタートした。安藤氏のファシリテーションにより、一人が発した言葉や視点をもとに別の人が言葉を重ねていくという流れで進み、鑑賞する視点や感じ方の多様さを感じ、話す内容に深まりが得られた。自分の感じたことを話す、他者の話を聞く、といった「対話」の意義について考えることができた。

▲「話す」「聞く」ことを意識するために、話す人が「大根」をもつルール

【第3回みんなのキンビ研究会】※講師の諸事情により中止

日　時　令和6（2024）年2月9日（金）14：45～16：00

講　師　秋田県教育委員　松塚智宏氏

テーマ　「第3の居場所における美術の楽しみ」

対　象　みんなのキンビプロジェクト実行委員会

【第4回みんなのキンビ研究会】

日　時　令和6(2024)年2月25日(日) 13：30～15：30

講　師　一般社団法人アーツアライブ代表　林 容子氏

テーマ　「アート×美術館×認知症：アートリップの概要と効果」

対　象　一般

内　容　①鑑賞体験：展示室における鑑賞プログラムの体験
②プログラムの臨床効果、実施するために必要なことについての講演会

近年、美術館を含む文化芸術団体による高齢者を対象にした多様な取組が展開されており、高齢化社会の課題に新たな切り口でアプローチできるものとして注目が集まっている。高齢化の進行が著しい本県においても、高齢者が生き生きと活動できる地域づくりは喫緊の課題である。当館コレクションを活用した鑑賞プログラムにより、地域における当館の果たす役割や可能性について検証する機会とした。高齢者（認知症当事者）と家族、介護者のための対話を通した鑑賞プログラム「ARTRIP（アートリップ）」についての体験及び講演会を実施した。

◀告知チラシ

(2)「キンビコミュニケーター」の養成

障害のある方の美術館へのアクセシビリティ向上をテーマに、養成講座を４回実施した。全国で先進的な取組を展開しているNPO法人エイブル・アート・ジャパンの「みんなでミュージアム」担当者を講師にむかえ、当館におけるバリア解消にむけた検討を行うとともに、多様な人が楽しめるワークショップを企画し、実施した。

【第1回養成講座】

日　時　令和5（2023）年9月23日（土）10：00～16：00

講　師　NPO法人エイブル・アート・ジャパン「みんなでミュージアム」担当チーム
柴崎由美子氏、高橋梨佳氏、原衛典子氏
NPO法人アートリンクうちのあかり　代表理事　安藤郁子氏
秋田県視覚障害者福祉協会　高橋信夫氏
秋田県難聴者・中途失聴者協会　会長　永井慎吾氏（事前協力）

参加者　高校生から70代までの19名

内　容　①障害（身体障害―肢体不自由／視覚障害／聴覚障害／内部障害等、知的障害、発達・精神障害）の特性等及びバリア（生活上または美術館へのアクセスや鑑賞等）の理解
②障害のある方の美術館における鑑賞を支援するという視点からワークショップ企画の立案

▲障害特性やバリアについての講義

▲当館の駐車場や建物のバリアについて検討

▲誰もが楽しめるワークショップについて検討▲

第1回キンビコミュニケーター養成講座 参加者アンケート

- 視覚障害も聴覚障害も生まれつきの人や後から障害をもつ人もいることが分かった。私自身、障害に対する知識や理解が足りていない中、今回の講座はとてもよい機会になった。これからの人生、障害者を含めいろいろな人と関わっていく自分を想像しながら考えるようになった。
- 障害について、社会の側に問題があるという思考に変わりました。
- 精神障害の人のこともあわせて考えたり勉強したりしたいと思いました。
- 障害者を特別視することをせずに共存できる世の中を作っていかなければと今後を見据えられました。
- 障害に対しての見方や考え方が変わったのと同時に、ある物や事に対しての見方も変わった。異なる視点から見て考える事も必要だという重要な事を学んだ。いろんな方と交流できて楽しかった。
- 「寄り添う」とは・・・と深く考えさせられた。知っているようで知らないことがたくさんあった。当事者から話を聞かなければ「何を配慮すべきか」が分からなかったと思う。「思い込み」をなくす大切さに気づけたし、どのように「思い込み」をなくすかを考えるきっかけになった。
- 私たち高校生の意見も否定せずに聞いてくれて嬉しかった。協力して考えた企画を成功させたい。

【第2回養成講座】

日　時　令和5（2023）年10月21日（土）10：00～12：00

講　師　NPO法人エイブル・アート・ジャパン「みんなでミュージアム」担当チーム
（オンライン参加）　代表　柴崎由美子氏、高橋梨佳氏、原衛典子氏

参加者　高校生から70代までの9名

内　容　「みんなのキンビ展」における
ワークショップ企画の検討

ワークショップ企画の様子（オンライン）▶

【第3回養成講座】

日　時　令和5年（2023）11月11日（土）10：00～12：00

講　師　NPO法人エイブル・アート・ジャパン「みんなでミュージアム」担当チーム
高橋梨佳氏

参加者　高校生から70代までの10名

内　容　ワークショップについて展覧会場での実践的検討
①視覚障害者と一緒に鑑賞するグループ
②聴覚障害者と一緒に鑑賞するグループ
2班に分かれて鑑賞方法について検討した

展示会場でのリハーサルの様子▶

【第4回養成講座（ワークショップの実践）】

日　時　令和5（2023）年12月9日（土）13：30～15：00

講　師　NPO法人エイブル・アート・ジャパン「みんなでミュージアム」担当チーム
柴田由美子氏、高橋梨佳氏

参加者　高校生から70代までの18名
ワークショップ参加者25名（うち視覚障害者2名、聴覚障害者1名、手話通訳者2名）

内　容　「みんなのキンビ展」におけるワークショップの実施

①「見えない人」「見えにくい人」と一緒に鑑賞するグループ
見える人と視覚に障害のある人が秋田県産業技術センターと協働で作成した「さわってみる絵」を触りながら「不忍池図」を鑑賞するワークショップ

②「聞こえない人」「聞こえづらい人」と一緒に鑑賞するグループ
展示作品である「たつこ像」の原型を見ながら、「たつこ」にまつわる新しい物語を考えるワークショップ。手話通訳者を交えて、音声を用いない「オールサイレント」によるコミュニケーションで実施。

※ワークショップは視覚グループ（14名）、聴覚グループ（11名）に分かれて実施
※各グループのキンビコミュニケーター及びワークショップ参加者の感想は26ページに記載

Ⅲ うごかす
～地域との協働アートプロジェクト「みんなのキンビ展」

(1) 特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」の開催

「みんなのキンビ展」は、「みんなのキンビ」プロジェクトの成果を展示する展覧会である。1年目の令和5年度は、テーマを「からだじゅうであじわう」とし、展覧会の名称は特別展「からだじゅう　で　あじわう　大根ビネーション展」とした。

本展では、「みる」ことにとどまらず、「さわる」、「きく」等、様々な感覚であじわえる展示やワークショップを行った。作家や障害のある方、デザイン会社、映像制作会社、高等学校や特別支援学校の生徒など、地域の多様な人々との協働により実現している。

本展は、「ふるさと秋田」や地域や人とのつながり、その背景にある「根っこ（ルーツ）」について多様な視点から見つめ直し、「私たちの根っこをもっと大きく、さらに太く育む」という趣旨から、「大きな根っこ」を象徴する「大根」を表現テーマに設定した。大胆で分かりやすく、かつ身近な切り口により、年齢や立場を超え、たくさんの方と一緒に作り上げることができ、展覧会名どおり思いが結びつく（コンビネーション｜Combination）空間となった。

また、展覧会関連イベントとしてワークショップを8回実施し、多彩な内容から、幅広い年代層、障害のある方の参加をいただき、交流の場としても意義があった。

会　期　令和5（2023）年11月11日（土）～令和6（2024）年1月28日（日）

会　場　秋田県立近代美術館　5階展示室

観覧料　一般500円、大学生以下無料（会期中何度でも入場可能）

主　催　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会
NPO法人アーツセンターあきた、NPO法人アートリンクうちのあかり
秋田県産業技術センター、秋田県立栗田支援学校、
秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校、秋田公立美術大学附属高等学院

企画・トータルディレクション　澁谷和之氏（澁谷デザイン事務所）

協　働　みんなのキンビ研究会
NPO法人エイブル・アート・ジャパン「みんなでミュージアム」担当チーム
（文化庁委託事業　令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業）
絵画作家　永沢碧衣氏

協　力　高性寺（五城目町）、柳澤龍（合同会社 運動）、AAREA(能代市)、東京農業大学、ナッツとドライフルーツのお店　木能実（能代市）、平川慧（能代市）、安藤郁子（秋田市）、高橋希（オジモンカメラ／秋田市）、長浜谷晋（秋田市）、鄭伽耶（小宇宙感光／五城目町）、三上健太郎（秋田市）、柚木恵介（秋田公立美術大学）、多賀糸尊（横手市）、草薙デザイン事務所（秋田市）、秋田協同印刷株式会社（秋田市）、株式会社アウトクロップ（秋田市）、田口康平（T-FARM／大仙市）、黒崎平（秋田市）、劇団わらび座（仙北市）、鈴木百合子（羽場こうじ茶屋くらを／横手市）、船橋陽馬（根子写真館／北秋田市）、根子集落の人々（北秋田市）、展示「Dai-Com-ASHI」モデル、横手市農林部食農推進課／園芸拠点センター、横手市立大雄小学校、秋田県立横手支援学校、雄物川郷土資料館（横手市）　※敬称略

来場者　2,458人（1月28日終了時）
うちセカンドスクール的利用※25校638人（うち特別支援学校8校179人）
※セカンドスクール的利用とは：教育施設等の人的・物的機能を十分に活用しながら、学校と教育施設等が連携して、各教科等の内容に関わる体験を伴う学習

■オープニングイベント

オープニングイベントでは、主催者等の挨拶、展覧会趣旨説明の後、横手市立大雄小学校「大雄っこ園芸部（横手市農林部食農推進課の職員が指導）」の児童が育てた大根を、主催者と小学生が一緒に引き抜く「大根ビネーション展　成長祈願」を行った。

■展示作品

第1展示室

Dego.1　大根絵馬に祈る（高性寺／五城目町）

Dego Challenge①　「大根絵馬に描いてお祈りしよう」（AAREA／能代市）

五城目の名刹・高性寺の大根絵馬。同寺の秘仏・歓喜天は財福と夫婦和合をもたらす神様として信仰されてきた。実際に絵馬を書くコーナーも設置。

Dego.2　根こそぎ"キンビの掘り出しもの"≪前編≫（千葉禎介・大野源二郎・勝平得之）

近代に入り、積極的にテーマとされるようになった地方の風景や風習。生活に密着した大根は秋田の生活でも欠かせない野菜であり、当館の所蔵作品にも登場する。"キンビの掘り出し物"として当館所蔵作品である千葉禎介や大野源二郎の写真、勝平得之の木版画を展示した。

Dego.3　押忍！大根おどり（東京農業大学×秋田県立横手支援学校＆キンビコミュニケーター）

秋田県立横手支援学校の生徒やキンビコミュニケーターが作った「大根」を持って踊るコーナー。子供たちはもちろん、東京農業大学のOBの方も来訪し、踊る姿もあった。

▲東京農業大学の「青山のほとり」（「大根おどり」）の動画を放映

Dego.4　ギリギリ大根実験室（ココラボ　ゴトー）

秋田市のアートスペース「ココラボラトリー」後藤仁氏による作品。パタパタとパネルをめくると、その組み合わせによって、見たことのあるもの、見たことのないものに変化していきます。大根がネコやイカ、クワガタに…。どこまでが大根か。なんとか大根に見えなくもないか。「まだ大根！」と歓声をあげる子供たちの人気コーナー。

第2展示室

Dego.5　root painting project（永沢碧衣）

▲鑑賞に訪れた方と一緒に

▲root painting project ワークショップの様子

絵画作家・永沢碧衣氏が館内に滞在し、作品を制作した。「穴であり、宇宙であり。ただただどこかに突き抜けている。（永沢氏投稿のXより）。」共同制作のワークショップで制作したり、鑑賞に訪れた人と一緒に制作したり、たくさんの人の手が加わった作品は、穴の向こうに宇宙が感じられる作品となった。

▶「かみこあにプロジェクト2023」で制作した『流転』を5階中央ホールに展示

Dego.6　いぶりがっこ物語（木能実、平川慧、NPO法人アートリンクうちのあかり）

能代市にある「ナッツとドライフルーツのお店　木能実」の商品開発秘話から、商品を包む素敵な包装紙の原画を描いた平川慧氏と、平川氏が通う「NPO法人アートリンクうちのあかり」を主宰する安藤郁子氏の物語。スチールカメラマン長浜谷晋氏が撮影した作品によって、物語はより立体的に語られていく。

その人それぞれに人や社会とのつながり方、つながる距離やリズムがあるということ。障害のある人もない人もみんな、人との関係の中で満たされたいと感じているということ。これからの目指すべき社会について考える展示となった。

Dego.7　夢の動物（秋田県立栗田支援学校×秋田公立美術大学附属高等学院）

秋田県立栗田支援学校と秋田公立美術大学附属高等学院は、美術を介した交流を8年間重ねてきている。令和5年度は「夢の動物」と題した作品を制作。映像作家・鄭伽耶（ていかや）氏（小宇宙感光）の映像で交流の様子も見ることができた。

Dego Challenge②　さわってみる絵「不忍池図」（秋田県産業技術センター）

秋田県産業技術センターと協働し、重要文化財である当館所蔵の小田野直武作「不忍池図」を題材とした「さわってみる絵」を作成した。視覚に障害のある方とセンター研究員が話し合いを重ね完成した。

◀各モチーフが立体的に表現され、線をなぞっていくと形がうかんでくる。見える人も、目を閉じ指先で感じてみる体験に興味津々の様子だった。

第3展示室

Dego.8　うんとこしょ!（秋田公立美術大根学）

秋田公立美術大学・准教授　柚木恵介氏の「秋田公立美術大根学」の皆さんが制作した貼り子で内部が光る大根を展示した。直径約1.5メートル、長さ約5メートルの巨大大根の作品。「うんとこしょ!」とかけ声を言い、たくさんの子どもたちが楽しんでいた。

Dego.9　近美チルドレンここに在り!（多賀糸尊）

秋田県立近代美術館に小さい頃から通い、仏像と道祖神を眺め、描き、横手で育った多賀糸尊氏の作品。壁を覆いつくす「段ボール仏」に圧倒される。顔はめパネルや、スタンプラリーは大人気のコーナーとなった。

Dego.10　秋田の風景のようなデザイン（草薙デザイン事務所）

商品のパッケージのみならず、秋田に住む人が日頃目にするたくさんのモノのデザインを手がける草薙デザイン事務所の作品。多様な伝統文化・食などの古き良き秋田の生活の営みが切り絵や和紙で美しく表現されている。

▲草薙デザイン事務所の切絵作品を秋田協同印刷株式会社の協力で触ることができるように加工した。

Dego.11　沼山からの贈りもの（株式会社アウトクロップ×沼山大根）

栗原エミル氏と松本隆滋トラヴィス氏（株式会社アウトクロップ）の「沼山からの贈りもの（27分間）」の公開。国際教養大学在学中に制作したこの短編映画は横手市大沢の伝統野菜「沼山大根」の復活背景に密着取材した作品で、本展ではプロジェクターで壁面投影した。

第4展示室

Dego.12　電気の根×咀嚼音BGM（秋田県立清陵学院高等学校×黒崎平）

音に合わせて光るLED作品「電気の根×咀嚼音BGM」の作品。音作品はアーティスト・黒崎平氏、「電気の根」は秋田県立横手清陵学院高等学校の生徒が制作。展示室内に響き渡る「いぶりがっこ」の咀嚼音に耳を傾け「聞こえる!」「見える!」

Dego.13　“大根役者”という言葉の謎（劇団わらび座／仙北市）

一般的にネガティブな意味で使われがちな“大根役者”という表現についての一考察。江戸時代の絵師・耳鳥斎が描いたユーモラスな「歌舞伎役者の地獄」の作品写真も添えて展示。

Dego.14　根こそぎ“キンビの掘り出しもの”≪後編≫（舟越保武「たつこ」「ANN」）

秋田県仙北市の田沢湖畔に立つ「たつこ像」。今回はその原作者である舟越保武による「たつこ像」の石膏原型と「ANN」を展示した。ポーズを真似たり、ANNを触ったり、当館所蔵作品をいつもとは一味違った見方で鑑賞を楽しんだ。

Dego.15　がっこ茶っこ物語（羽場こうじ茶屋くらを）

写真や畳に置かれた羽場こうじ茶屋のリーフレットを見ると「がっこ」が家庭で作る物から店で買う物に変化したことに気づく。法律改正によるいぶりがっこ生産者の撤退など、「秋田の味覚」の大切さについて考えさせられるコーナーとなった。

Dego.16　“根”子集落という生き方（澁谷デザイン事務所×根子写真館）

根子集落に移住した写真家 船橋陽馬氏の写真で根子集落の人々の暮らしが語られる。

コンビニも自動販売機もないという“便利”とはかけ離れた生活の中に、失われつつある「大切なこと」があるということを気付かされる。

Dego.17　Dai-Com-ASHI（澁谷デザイン事務所×根子写真館）

いろいろな年齢や職業の人の足を撮影した写真が9枚並ぶ。来場者からは「足や顔など自分の体は自分の人生の選択によって形づくられていることを改めて感じた」との感想もあった。

■来場者アンケートより

（いぶりがっこの）包装紙もお話も素敵でした。毎回参加できないのですがワークショップを期待しています。参加したいです。ADHD当事者です。人気のない時をねらってきました。一人で来るのは勇気がいりましたが、とても感動しました。障害を少しでも理解してもらえた気がしてうれしかったです。がんばってください。

耳の聞こえない人への対応もあるといい。おそらく「見ればわかる」というもの以上が展示にあると思う。多様なテーマにわたっていたのに、大根を中心によくまとまっていた素晴らしい展覧会です。でも、団体以外誰もいない。集客に工夫を。

このような展示を毎年やってほしいです。テーマがあっておもしろい。私もいつか展示に参加したいと思いました。

会期中、半券を提示で何度も訪れることができるのは非常に魅力的でした。

今回のように年齢層が広い対象で作品を楽しめるのがとてもよかったです。「さわってもOK」も嬉しい。次は子供もつれて見に来ます。

観るだけでなく体験できる美術館、いいと思います。有名な方だけでなく、一般の方の作品が一部展示できるコーナーがあるといいと思います。

芸術は自由を表現する場所、絵だけでなく音でも伝わる。そんな芸術があれば広まりやすいと思う。東京農業大学のOBなので来ました。大根と一緒に展示があってうれしかったです。

半券で期間内はいつ見てもOKというのがとてもありがたい。体力がないので心が動きまくる展示は全部見て回るのがしんどかった。ありがとうございます。

幼いころから美術館に関わりをもち、大人になっても関わりをもち続けられるような企画があるとよい。「大根」「根っこ」というキーワードから多様な世界がつむぎだされて、紹介されており、おそらくは期間を通じて点が線になり始めているのではと感じました。また、私たち鑑賞者も近美を舞台とした多様な世界を面として興味深く受け止めることができました。勝手に宣伝組合の力、素晴らしいです。

今回のようなみんなの参加できる企画を引き続き考えてほしいです。

PRしているのかもしれないが、娘から知らされなければ分からなかったので宣伝する方法に工夫が必要か。

老若男女問わず誰でも知ることができるような発信で、もっと周知できるようだといいと思います。

地域の課題を扱う住民参加・参画でつくる展示やプロジェクトを今後も増やしてほしい。

根っこ集落、また行きたくなりました。たつ子像の原型、道路工事の娘さんがモデルなんてシビレました。スコップを持たせたいです。今回の展示のように見るだけでなく触れるのがあるとよいです。

「近美チルドレン」社会教育、生涯学習の理想のような事例だと思いました。会期中、半券を提示で何度も訪れることができるのは非常に魅力的でした。「みんなにひらかれた美術館」としての企画・取組に感銘しました。

作品も思いがこもっていて一日では回るのが難しいくらい素敵でした。また来ます。

障害者の方が地域とつながっていること。自分は県外に住んでいるため分かりませんが、地元の中高生がもっとキンビに行けたらよいと思う。大学生無料にしてくださりありがとうございました。とんでもなく満足しました。

全県の学校の作品展（小中校）、特別支援学校なら作業販売もありかと思います。

このような敷居が高くない市民の入りやすい仕組みを考えてもらいたい。

様々な展示があって見ごたえがあった。

秋田県では珍しい企画展と思った。すばらしい。古き良き美術館という枠を取り払って視覚でなく触覚でも楽しめるものがあるのは良いと感じた。

誰かが作った作品ではなく、作った人やその人となりが見えるようで面白かったです。

最初は「何だろうなあ？」と思いながらみて、最後に「すごいな」と感心しました。

■関連ワークショップ

【ワークショップ1】

「心も体もポッカポカ『ん？ほほ～あっ！わぁ♫じーん』からだじゅうであじわう表現ワークショップ

日　時　令和5（2023）年11月18日（土）《午前の部》10：00～12：00《午後の部》13：30～15：30

参加者　2歳から70代までの15名（午前の部8名、午後の部7名）

内　容　劇団わらび座のチーフインストラクター齋藤和美氏による
からだとこころの表現ワークショップ

導入は、簡単なリトミック的な活動やシアターゲームを行った。インストラクターのリードにより、最初は緊張していた参加者たちからも次第に笑い声がこぼれるようになった。全身をアンテナにして、静かに自分の身体の声に耳を澄まし、相手の気配に全身で触れていると、不思議な一体感が生まれた。午前の部と午後の部の参加者に応じた内容で、無理なく心と体を解きほぐすワークショップとなった。

【ワークショップ1】アンケート回答
参加者の声

- みんなが正解という言葉がよかった。体を一緒に動かすことで心がつながることを感じた。
- 展示室でのワークショップで、作品を体で感じることができた。今回のような敷居の高くない展覧会がもっとあってほしい。
- 展覧会場でわらび座さんの歌声が響いて感動した。体が解放されると心も開放されると思った。
- 楽しいワークショップでした。絵を見る…ではなく、心の勉強ができました。
- 小さい子供がいるので、当日まで参加できるか分からなかったので、参加できてうれしかった。参加した皆さんと一体感が生まれ、最後まで楽しめた。
- 今回のようなみんなで参加できる企画を引き続きお願いします！

【ワークショップ2】

「永沢碧衣さんとroot painting project」

日　時　令和5（2023）年11月25日（土）13：30〜16：00

参加者　4歳から70代までの20名

内　容　本展会場にて滞在制作している永沢碧衣氏と一緒に
作品の制作を楽しむワークショップ

展覧会初日から永沢氏が会場に滞在して、来場者と一緒に描き進めている「大きな穴」と「根っこ」をモチーフとした作品に、ワークショップ参加者がさらに描き加えるという活動を行った。「根を伸ばす人」「土を育てる人」「光をあげる人」「影を与える人」の中から自分の好きな活動を選び、取り組んだ。それぞれが裸足になって絵の具にまみれながら無心で描いた。誰かが描いた「根っこ」に光をあて、影を付け、様々な色、大きさの土がその間を埋めていった。「そこにはいない誰か」の筆あと、存在に思いをはせ、つながりを感じる時間となった。

【ワークショップ2】アンケート回答
参加者の声

- どう描けばよいか不安だったのですが、先に描いていただいた方の線が刺激になり手を進めることができました。
- とても「つながり」を感じられる瞬間であたたかい気持ちになりました。ありがとうございました。
- みんなで描いた砂の（粒の）絵が最後本当にすごい作品となってグッときました。
- 子どもたちが絵の具だらけになって、大きな絵の上を自由に描く経験は、子どもたちの宝になったと思います。
- みんなで一つの作品を作り上げるのは楽しかったです。

【ワークショップ3】

「キンビコミュニケーターワークショップ
『みる』『きく』『さわる』一緒に楽しむ鑑賞会」

日　時　令和5（2023）年12月9日（土）13：30～15：30

参加者　一般参加者11名（うち視覚障害者2名、聴覚障害者１名、手話通訳者2名）
キンビコミュニケーター18名

内　容　キンビコミュニケーター企画によるワークショップ

「見えない人」「見えにくい人」と一緒に鑑賞するグループ、「聞こえない人」「聞こえにくい人」と一緒に鑑賞するグループに分かれて行った。

今回のワークショップは、見える人、見えない人、見えにくい人、聞こえる人、聞こえない人、聞こえにくい人、美術に関心がある人、これまで美術に関りがない人など、様々な人と一緒に鑑賞することの楽しさに気づくことができたワークショップとなった。

【「見えない人」「見えにくい人」と一緒に鑑賞するグループ】

見える人と視覚に障害のある人が秋田県産業技術センターと協働で作成した「さわってみる絵」を触りながら「不忍池図」を鑑賞するワークショップ。

【「聞こえない人」「聞こえにくい人」と一緒に鑑賞するグループ】

展示作品である「たつこ像」の原型を見ながら、「たつこ」にまつわる新しい物語を考えるワークショップ。手話通訳者を交え、音声を用いない「オールサイレント」によるコミュニケーションで実施。

【ワークショップ3】アンケート回答
参加者の声

【「見えない人」「見えにくい人」と一緒に鑑賞するグループ】

一般参加者

●資料（さわってみる絵）に触れられて良かった。資料に触れながら説明を聞ければよかった。今回のようなイベントを定期的にやってほしい。

●単に目の見えない人や関係者のワークショップではなく、高校生やボランティアなど様々な人と一緒に活動することで双方にとってメリットがあると感じた。ゆっくり鑑賞させてもらった。時間の補償は大切。ただ、さわり方、触らせ方のスキルを高めていけたら良いと感じた。

●初めての体験で新鮮に感じた。親切な対応が良かった。説明の手順がもっとスムーズになると更に良い、概要の説明が長すぎるため、触る時間をもっととれたら良いと思う。

キンビコミュニケーター

◆見たままを伝えればいいと思っていたけど、感情を読み取ると言うことも大切であると分かった。もっと障害を持っている方と関わりたい。

◆見える人と見えない人では見方が全然違うことが分かった。感じ方も全然違う。他に普段関わらないような人とも関わりたい。語彙力も大切だと思った。

◆視覚障害をもった方々と一緒に鑑賞したことで、自分自身の想像力も豊かになった。視覚障害の方への理解が深まった。自分と違う経験をしてきた様々な人と関わってみたい。自分と異なる考えや感じ方をもった人を理解したい。

◆鑑賞を一緒にしてみて、見えにくい人たちの不安、悩みを直接聞くことができた。絵の説明をして役に立てて良かったし、接するのが楽しかった。

◆「私たちは最初絵が（見え）ない」という発言を聞きました。当たり前を無意識にしていたことに気づいた。今後に大きく影響すると思う。

◆絵をここまで詳しく細かいところまでじっくり見ることも、それを目の見えない人に伝えることも初めてでしたがいい経験ができて良かった。絵は「見る」という考えしかなかったので新しい力がついたと思う。

◆手探りだったのでやり方がわからず、参加してくださった方に御礼を申し上げます。どうすれば分かりやすいのか勉強になった。

◆来年度も続けてみたいと思った。

【「聞こえない人」「聞こえにくい人」と一緒に鑑賞するグループ】

一般参加者

●体で表現する楽しさを味わえた。筆談の字が小さく見えづらかった。（改善点）

●聞こえない人、聞こえづらい人も楽しめる計画だった。これからもお互いに筆談してコミュニケーションをとってみたい。今回だけで終わりでなく、定期的に行ってほしい。

キンビコミュニケーター

◆障害を持っている、持っていない関係なく、一つのことにみんなで取り組んで楽しい時間をつくることができた。たくさんの出会いがあった。筆談でも気持ちが伝わり楽しめると分かった。ジェスチャーのあたたかさを感じた。みんなと一つのものをつくりあげられてよかった。

◆普段関わることのない人と特別な形でコミュニケーションをとることができてよかった。みんなの前で立って発表して学校より緊張した。そのおかげで自信がついた。

◆緊張、困惑、不安→楽しい！おもしろい！　関心につながった。

◆全部ジェスチャーで表現するのは難しかったけど楽しかったし、たくさん学ぶことができた。耳の聞こえづらい人や聞こえない人と過ごすととても静かで新鮮だった。手話を習得したいと思った。

◆とても楽しい経験でした。自分はなかなかうまく表現できなかったので。通り一遍の型にはまった鑑賞ではない体験で、作品への接し方が変わったように思う。

◆障害のある人も一緒に企画に参加できたらいいと思った。

◆ジェスチャーでこれだけ笑いもあり、伝わっていることが感動的だった。人前に出ることが楽しく感じた。体の不自由な方が一人で来場しても安心できるサポートができたらと思った。

◆満足した訳でもうまくいった訳でもありませんが、お互いが思いやることで意思疎通は図れることが分かった。

◆初めての体験で若い高校生やボランティア、年配の人、聴覚障害の人などいろいろな人に触れることができた。より障害について考えるようになった。キンビに来たことがない人がまだまだ多い。公民館単位で地域の人たちを招待するなどできたら。

【ワークショップ4】

「おしゃべり鑑賞会」

日　時　令和5（2023）年12月16日（土）13：30～15：30

参加者　4歳から70代までの24名

内　容　本展の企画に関わった3名の方と一緒におしゃべりしながら鑑賞するワークショップ

藤　浩志氏（秋田公立美術大学教授　NPO法人アーツセンターあきた・理事長）
永沢碧衣氏（本展出展作家）
澁谷和之氏（澁谷デザイン事務所）

藤氏からは学術的な視点から、永沢氏からは作家としての視点から、澁谷氏からは本展の企画という視点から、作品や展示について感じたことなどを話していただいた。参加者からの質問や感想を交えながらじっくり鑑賞する時間となった。

【ワークショップ4】アンケート回答
参加者の声

- 一人で静かに見て考えたことと、多くの人とおしゃべりしながら見て考えたことというのが違ってとても面白かったです。
- 今回の展示の趣旨がよく分かりました。日曜美術館みたいな感じが近代美術館でできるなんて感動しました。
- 実際に展示にかかわった方から話を聞くことができ、キャプション等の説明とはまたちょっと違う展示されているモノや、それにまつわるモノの味わいみたいなことが深く感じることができよかったです。
- 生活レベルの話題で美術館の敷居が下がった。
- 説明も分かりやすく、参加者も話に加わりながら身近に感じることができて良かったです。
- 「みんなのキンビ」次回は見る側ではなく作る側で参加したい。

【ワークショップ5】

「クリスマスカラーでつくってみよう」

日　時　令和5（2023）年12月23日（土）10：00～12：00

参加者　5歳から70代までの15名

内　容　クリスマスカラーの様々な素材を使ったクリスマスランタンづくり

　参加者は知的障害のある方を含めた15名であった。紙粘土やビーズ、木の実など思い思いの素材を使って制作活動に取り組んだ。今後は参加者同士の交流が生まれるような活動も検討したい。完成した作品はキンビコミュニケーターと秋田県立横手支援学校の生徒が制作した「大根カラーの袋」に入れて持ち帰った。

【ワークショップ5】アンケート回答
参加者の声

- いろいろなものを使って作品を作れて楽しかった。家庭では材料を集めることが大変なので。
- 子どもたちが楽しんで作業してくれた。障害の有無にかかわらず交流ができることを希望します。

【ワークショップ6】

「うちのあかりワークショップ
～大根ビネーション展鑑賞会＆喫茶ポラリス～」

日　時　令和6（2024）年1月6日（土）13：30～15：30

参加者　30代から60代までの9名

内　容　地域活動センター「アートリンクうちのあかり」のメンバー佐藤元気氏と
アートを介した対話による新しい出会いの場づくりについて考えるワークショップ

当館6階の講師控え室に「喫茶ポラリス」という架空の喫茶店を設定し、実際にお茶を飲みながら、佐藤氏のお話をもとにそれぞれが感じたことなどを語り合った。参加者はほとんどが初対面であったが、次第に打ち解け、「心の支え」など、普段はあまり考えたり、言葉にしたりすることがない内容についても語り合う時間となった。

【ワークショップ6】アンケート回答
参加者の声

- 「喫茶ポラリス」にてみんなの心の支え（根っこ）を聞くことができてよかった。なかなか自分の心と向き合う時間というのがなかったので良いタイミングでした。
- みんなにひらかれた美術館を目指すうえで、今回のトーク形式はすごくよいと思う。考えや気持ち、生き方を知ることができる。
- 参加者同士がフラットに話せる雰囲気がよかった。思う以上の気づきと嬉しさがありました。
- 「げんちゃん」の「喫茶ポラリス」。「げんちゃん」のルーツがしっかり聞けて、この「大根ビネーション展」の「大きな根っこ」に響く内容でした。
- 普段の生活のなかでは限られた人としか関わらないのですが、多様な皆様の話が聞けてよかったです。
- このワークショップに小・中・高校生も参加できたら良かったです。

【ワークショップ7】

「雪のキャンバス　お絵かきワークショップ」

日　時　令和6（2024）年1月13日（土）10：00～12：00

参加者　延べ30名の親子

内　容　高校生キンビコミュニケーターの企画による
ワークショップ

高校生キンビコミュニケーターが企画から準備、進行まで行った。キャンバスに見立てた雪やかまくらに絵を描く活動、雪の塊から宝探しをする活動を行った。偶然通りかかった方から雪のキャンバス作りを手伝ってもらうことができ、たくさんの親子連れに楽しんでもらった。高校生も充実感を感じていた。

【ワークショップ7】
高校生キンビコミュニケーターの声

- 小さい子供たちがすごく可愛らしくて楽しんでいる様子が嬉しかった。
- 子どもたちがとても楽しそうにはしゃいでいて嬉しかった。行動あるのみ!と感じた。
- 雪の楽しさを感じた。子供たちと触れ合うことができて良かった。
- 「みんなのキンビ」のために、たくさんの世代が関われるような企画があればいい。

【ワークショップ8】

「大根ビネーション展　大収穫祭」

日　時　令和6（2024）年1月27日（土）14：00～16：00

参加者　38名

内　容　展覧会関係者とともに、「みんなのキンビ」について考えるワークショップ

スライドでプロジェクト全体を振り返りながら、目指す「みんなに開かれた美術館」について意見交換を行った。今回つながった人や機関とどのようにつながりを深めていくか、多様な人と対話の場をどんな形でつくっていくかなど、様々なことが話題にあがった。

(2) 所蔵作品の新しい鑑賞方法を提案するツール「さわってみる絵」の作成

本取組は美術作品を視覚だけによらず、様々な感覚を用いた鑑賞活動のあり方を試行することで、障害のある方へのアクセシビリティの向上を目指すことを目的としている。令和5年度は、当館所蔵の「不忍池図」を題材とした「さわってみる絵」の制作を、秋田県産業技術センターと協働で行った。視覚に障害のある方の意見をフィードバックさせながら検討を重ねて完成した「さわってみる絵」を、「大根ビネーション展」の展示会場に「不忍池図（レプリカ）」とともに展示することで、視覚に障害のある人と障害のない人が共に鑑賞するワークショップを実現することができた。

■「さわってみる絵」の作成検討会

【第1回作成検討会】

日　時　令和4（2022）年12月7日（水）

場　所　秋田県産業技術センター

参加者　秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・部長　内田富士夫氏
先進プロセス開発部・研究員　瀬川 侑氏
秋田県立近代美術館　学芸主事・北島珠水

内　容　「みんなのキンビ」プロジェクトの概要及び秋田県産業技術センターの技術等について共有した。

【第2回作成検討会】

日　時　令和5（2023）年6月16日（金）

場　所　秋田県産業技術センター

参加者　秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・部長　内田富士夫氏
先進プロセス開発部・研究員　瀬川 侑氏
電子光応用開発部・主任研究員　綾田アデルジャン氏
秋田県立近代美術館　主査（兼）学芸主事・保泉 充
学芸主事・北島珠水

内　容　視覚障害者に美術館を身近に感じてもらうこと、また美術鑑賞を視覚だけによらず、様々な方法で作品にアプローチする方法という視点から、どのようなツール開発の可能性があるかについて検討した。

【第3回作成検討会】

日　時　令和5（2023）年8月23日（水）

場　所　秋田県産業技術センター

参加者　秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・部長　内田富士夫氏
先進プロセス開発部・研究員　瀬川 侑氏
電子光応用開発部・主任研究員　綾田アデルジャン氏
三上健太郎氏（視覚障害当事者）
秋田県立近代美術館　主査（兼）学芸主事・保泉 充
学芸主事・北島珠水

内　容　当館所蔵の「不忍池図」を題材に3Dプリンターで作成した鑑賞支援ツール試作品について視覚に障害のある三上氏と検討した。作品の規格や画面の情報の整理、カーブ（視覚に障害のある方は指先が敏感であるため）等の改善点が挙げられた。

▶第3回検討会の様子

【第4回作成検討会】

日　時　令和5（2023）年10月4日（水）

場　所　秋田県産業技術センター

参加者　秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・研究員　瀬川 侑氏
電子光応用開発部・主任研究員　綾田アデルジャン氏
三上健太郎氏（視覚障害当事者）
秋田県立近代美術館　主査（兼）学芸主事・保泉 充
学芸主事・北島珠水

内　容　第3回検討会の改善点をフィードバックし、影の描写の処理や背景部分（空と湖面）の触感の差異、カーブの付け方などを改善した。

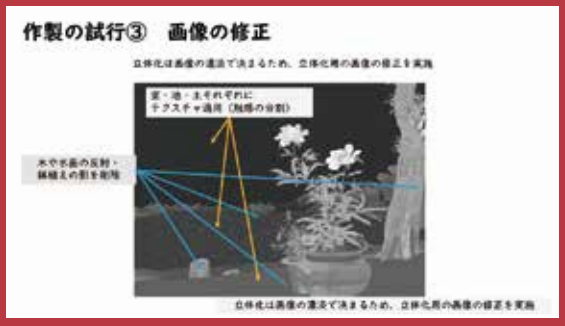
▶第4回検討会の様子

作成に携わった瀬川侑氏の感想

絵画を目の不自由な方も鑑賞できる本ツールは全くの手探りからの始まりでした。様々な情報を元に画像から3Dデータを作り、触わることができる絵の試作品を3Dプリンタでどうにか製作しました。

実際に目の不自由な方へ触ってもらうと、「説明されても何が描いてあるかよくわからない」とのコメント。光、影、色の感覚がないという事実を考えず、絵を理解している私の目線で製作したことで、意味不明な造形を生み出してしまったのです。相手目線で世界が見えていなかったことに気づかされました。

この鑑賞支援ツールは見えないことは何かを考え、風景を手で感じられるよう触感を分けるなど工夫をこらしていますが、目を閉じて触るだけではただの凹凸のある板です。ツールに触れている人が絵画を見ている人と何が描いてあるか言葉を交わすことで、相互に解像度を持った世界を「見る」ことができます。このツールを触媒に新たな世界を見出していただければ幸いです。



(3) 学校等との交流

■秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校との交流

秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校は横手地区にある全国初の工業系の学科を持つ中高一貫教育校である。地域の学校として、また、専門的な技術力を有する学校として「みんなのキンビ」プロジェクトでの協働を依頼した。教員や生徒の皆さんから様々なアイディアをいただき、当館主催の「キンビ・創作体験プログラム きっずあーとおさかなすいぞくかん」での技術協力や「みんなのキンビ展」で作品を制作、展示していただいた。

「キンビ創作体験プログラム　きっずあーと　おさかなすいぞくかん」

日　時　令和5（2023）年8月6日（日）10：00～12：00

参加者　23名（内保護者9名）　横手清陵学院中学校・高等学校6名

内　容　参加者の子供たちが描いた絵を高校生がスキャナで読み取り、スクリーンに映し出すという活動を行った。魚の種類によって動き方や大きさが変わるプログラムがされており、自分の描いた絵が画面を泳ぎ始めると子供たちから大きな歓声があがった。生徒を引率した教員からは、「学校でも一般客向けのワークショップ的な活動は行っているが、学校では見られない積極的な姿や場面や子どもに応じて機転を利かせて対応している姿に驚いた。」との感想をいただいた。

キンビ創作体験プログラム
参加者の声

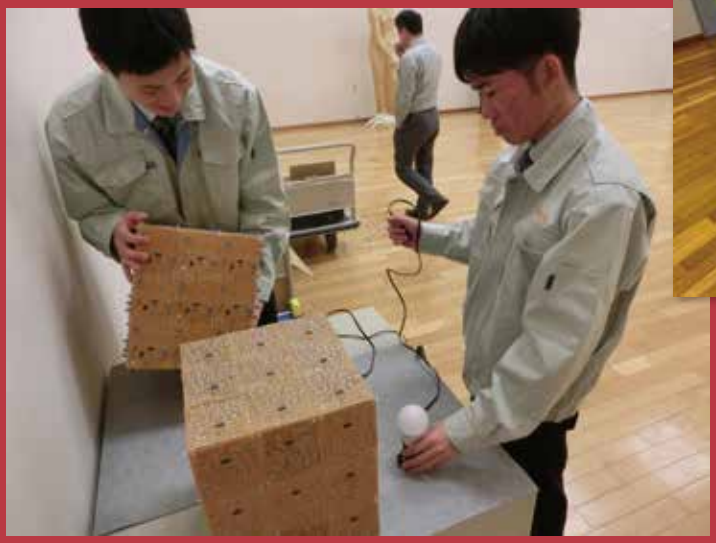
- 色鉛筆の色がたくさんあってすごかった。「メンダコ」の本当の動きでうれしかった。お兄さん、お姉さんもいて楽しかった。
- 自由に好きな絵を描いて、それが動くというのは子供たちにとって不思議で楽しい経験となったと思います。
- お兄さん、お姉さんと一緒につくりあげるイベントはなかなかないので、刺激になってよかったです。自分のつくったものが動くので喜んでいました。
- とても楽しかったです。我が家は遠いので子供たちが疲れてしまうかな?と心配だったのですが、泳ぎ始めた瞬間の感動がうれしかったです。学生さんたちの子どもに寄り添ったお話の仕方やコメントなどもすばらしかったです。ぜひ、県北でも開催してほしいです。
- 人見知りがひどく、本人はなかなかお絵描きは進みませんでしたが、とても楽しかったようです。うつぼに全力をかけましたので本人は今日のミッション達成です。ほかのお友達の魚を見ることも楽しく、自分の描いた絵が泳いでいて感動していました。
- 自分の描いた魚が泳ぐのが楽しかったようです。学生さんとの交流も新鮮でした。

秋田県立横手清陵学院高等学校3年
齋藤大馳さんの感想

まず「大きな根」というタイトルから作品を想像したとき、"工業らしさと人々の繋がり"を作品で表現したいと思いました。そして、作品を考える過程で、基盤のパターンが根と根が繋がり合う形に似ているなあと感じ、そのアイデアから「電気の根」の制作を始めました。この「電気の根Cube」「電気の根Front」「電気の根Back」の共通部分である「電気の根」は、電子デバイスへエネルギーを運ぶ回路やパターンを、栄養分を運ぶ植物の「根」となぞらえています。

「Cube」は根(回路)が立体的に張り巡らされ、512個のLEDへ繋がっており、「Front」は基盤のパターン(根)が立方体表面側に、「Back」は立方体裏面側に向けて組み立てました。「Front」と「Back」は「いぶりがっこの咀嚼音」に反応して、内部に置いたランプの点灯状態が変化し、基盤のパターンをリズミカルに浮き立たせる作品になっています。

今回のこの作品は、3Dプリンターで制作する際の手伝いや、設計、材料のカット、穴開けなど、友達や先生をはじめとした多くの人の協力があったからこそ完成できた作品です。その人と人との思いが繋がり合っていく背景やイメージも、この作品の「電気の根」という作品を通じて感じ取ってもらえたら嬉しいです。



◀▲いぶりがっこの咀嚼音に反応して光る作品
「電気の根」の制作

■「大雄っこ園芸部」（横手市立大雄小学校と横手市農林部食農推進課）との交流

地域の食や産業、生活を支え、いのちを耕す農業は、「みんなのキンビ」プロジェクトを推進する上で大切に考えていきたいテーマである。横手市農林部食農推進課では、子どもたちに食を通じて、横手の新たな魅力の発見や農業の大切さを伝え、そして愛郷心を育む食農体験プログラムを行っている。そのプログラムの一つである「大雄っこ園芸部」は大雄小学校と園芸拠点センターが徒歩圏内にある地の利を生かして令和4年度に発足した全国でも珍しい小学生による園芸部である。令和5年度の「みんなのキンビ展」で、「大根」を表現のテーマに設定したことから、「大雄っこ園芸部」では、肥料袋で大根を栽培することとなった。展覧会のオープニングイベントの「大きな根っこ成長祈願」では、主催者と「大雄っこ園芸部」の皆さんが一緒に大根を引き抜いた。

■秋田県立栗田支援学校と秋田公立美術大学附属高等学院の交流及び共同学習の取組

両校は、8年に渡り美術を通した交流及び共同学習の取組を積み重ねている。今年度は栗田支援学校中学部2年生と美術大学附属高等学院2年生が3回の交流を重ね「夢の動物」と題する作品を制作した。絵の具の色を一緒に選んだり、折り紙を一緒にちぎったりといった小さな関わりをたくさん重ねて完成させた作品を「みんなのキンビ展」で展示した。また、3回の交流には、映像作家の鄭伽耶氏が同行し、鄭氏が見つめた両校の生徒たちの様子を映像作品として作成し、会場内で放映した。映像作品からは、作品の制作活動を通して両校生徒たちの関係が培われていく様子が見て取れる。美術を通して人と人との交流の意義や可能性、多様な人と共生する社会について考える機会となったと感じている。

「今回の交流を終えて」

秋田公立美術大学附属高等学院
岸上恭史教諭

今回の活動を通じて、美大附属の生徒たちに感じてほしいと思っていることの大きな一つは「美術には人と人をつなぐ力がある」ということです。

日頃、生活を共にしているわけではない、年齢も経験も違う2校の生徒が出会い、そんなに長くない交流時間の中でこれだけ活発に活動ができるのは、言葉によるコミュニケーションだけではなく、目には見えない「こうしたい」というその人の思いが色や形に現れ、自然にそれを共有できているからなのだと思います。

そして、もう一つは「色や形、素材を純粋に楽しむ」ということです。

美大附属の生徒は日頃、作品を作ることを専門に学習として行っているため、限られた時間で完成させるための計画を立てることに慣れています。

一方で、栗田の生徒さんたちは、色や形のリズムや響き合い、紙をちぎるときや絵の具の手触り、毛糸のもじゃもじゃした質感などに対して純粋に向き合い、ひとつの行為が次の行為を呼び、その作業の楽しさにのめり込んでいるように感じられました。

美大附属の生徒たちも、おそらく子供の頃などに感じて居たであろう造形活動の純粋な喜びや姿を、栗田の生徒さんと一緒に活動することで思い出している気がします。

そして、最後は「多様性を尊重すること」についてです。最近ではダイバーシティという言葉が一般化し、「人間は

一人ひとり違う」とよく耳にするようになったものの、独立した個である自分と他者がそっくりそのまま共有し合えるようになることはとても難しいことだと感じます。

しかし、それでも私たちは、思いや願いを共有しながら日々、他者と生活を送っています。美術の道を志し、似たような気質をもった生徒によって形成されたアットホームで安心感のある環境（学校）に慣れてしまった美大附属の生徒たちが、将来次に進んでいく世界（次の学校、会社、地域、新しく築く自分の家族など）には様々な個性をもった人たちとのたくさんの出会いが待ち受けているはずです。

自分もその誰とも違う“個性をもった者のうちの一人”なのだという自覚の上に立ち、共に生きていくために、分かり合う努力を続ける姿勢をもてるよう、この交流がその第一歩になればと願っています。

「今回の交流を終えて」

秋田県立栗田支援学校
五十嵐智子教諭

今年の美大附属の生徒さんたちとの交流は、スポーツや制作活動を通し、相手のことを受け入れたり、知ったり、協力したりすることで経験を広げていきたいという気持ちからスタートしました。

1回目のモルック（フィンランド発祥のスポーツ）交流では、ゲームを通して次第に声を掛け合ったり、点数を一緒に数えたりと、少しずつ打ち解け、笑顔もたくさん見られました。生徒からも「楽しかった」「またやりたい」などの声が多く聞かれ、「また会おうね」と約束し、次の交流が楽しみな様子でした。

2回目、3回目の制作交流では、自分たちが作った「夢の動物」の土台を見た美大附属の生徒さんから「おーすごい」「面白い形だね」などの感想をもらい、とても嬉しそうな生徒たちでした。

どんな色を着けるのか、どんな装飾をするのかなど、相談し合いながら制作が進み、積極的に美大附属の生徒さんと関わろうとする姿も見られるようになりました。

「笑顔で接してくれるのが嬉しかった」
「難しかったところを手伝ってくれた」
「みんなで作って楽しかった」

交流の後日、栗田の生徒からはこのような感想が聞かれ、ひとつのものを一緒につくりあげたという達成感を味わうと共に、美大附属の生徒さんの豊かな発想に触れることができたとても良い交流になりました。

Ⅳ のこす
～記録映像及び報告書の制作～

- 各事業の取組の様子を写真、映像等で記録
- 映像作家の鄭伽耶氏による映像記録の制作
- 事業実施報告書（本書）500部の作成及び関係各所へ送付

V ふりかえる
～評価とフィードバック～

発展的で継続的な協働を目指し、「みんなのキンビ」実行委員会において、プロジェクトの具体的方策についての共有及び評価を行った。なお、具体的には「VI　今後に向けて（成果　課題と方向性）」にまとめている。

■「みんなのキンビ」実行委員会の実施

【第1回「みんなのキンビ」実行委員会】

日　時　令和5（2023）年8月22日（火）13：30～15：00

出席者　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員14名

内容　「みんなのキンビ」プロジェクトの計画の策定と共有を図った。これまでの各実行委員の取組等をもとに意見交換を行い、今後のプロジェクトの具体的方策について検討した。

【第2回「みんなのキンビ」実行委員会】

日　時　令和6（2024）年2月9日（金）13：30～15：30

出席者　「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員14名

内容　「みんなのキンビ」プロジェクトの取組成果や課題等について共有し、今後のプロジェクトのさらなる推進に向けた方策の提言を行った。特に藤副会長からは、美術館の存在意義のひとつである現代の作家や作品、活動などをアーカイブし、価値づけ、未来につなぐことの大切さについて、また、美術館の機能や期待される役割が多様化する中、改めて作品についての調査・研究、展示することへの提言をいただいた。役員の中田生涯学習課長からは、近代美術館が「みんなのキンビ」プロジェクトの中核を担う役割として今後も多様なコミュニティと連携しながら、社会課題への関与や多様な人との対話の拠点となることについての提言をいただいた。今後、本プロジェクトの成果と課題をもって、県内の他の博物館等との連携を深めていきたい。

VI 今後に向けて
（成果　課題と方向性）

ここでは、「みんなのキンビ」実行委員会での各委員からの意見、各事業の参加者等から挙げられた声などに基づき、成果や課題などについて整理し、今後の取組の方向性を示す。

(1)「みんなのキンビ」ネットワーク構築事業

【美術館を核としたネットワーク構築による地域が抱える課題の検討】

［成果］

●本プロジェクト全般を通じて、県内外の様々な企業や団体、学校、個人とのネットワークを構築することができた。

［課題と方向性］

●高齢者や不登校の子どもたち等を「アートを必要とする『切実な人』」としてとらえながら、今後の美術館の役割（プロジェクトの方向性）を検討していく。

●「みんなにひらかれた美術館」について検討する中で、高齢化や、経済格差に伴う子どもたちの体験の格差、不登校やひきこもり等の増加など、プロジェクトで向き合うべき地域の社会的課題が明らかとなった。

【アートを介した対話や学びの場の創出】

［成果］

●キンビコミュニケーターや「みんなのキンビ研究会」による実践を通して、年齢や興味・関心の違い、経験の差、障害の有無等を越え、自由に意見を交わし、違いを認め合う場とすることができた。

［課題と方向性］

●プロジェクトの参画者や展覧会の参観者の声から、より多様な人々（「美術館を利用できない状態にある人」）に、アートを通してつながる機会や場が求められている。

●県内の博物館施設と連携し、アウトリーチやデジタルコンテンツの活用等により、「みんなに開かれた美術館」としての場づくり・仕組みづくりを続けていく。

【キンビコミュニケーターの養成】

［成果］

●養成講座に参加した20名は高校生から70代までと幅広く、思いがけず多世代間交流の機会ともなり、参加者の行動変容を生んだ。

●自らワークショップを企画したり、また参加したりすることで、それぞれに課題意識が生まれ、プロジェクトに主体的に関わる積極的姿勢が醸成された。

［課題と方向性］

●キンビコミュニケーター同士の中に「教え・教えられる」という関係性が少なからず見受けられた。そのことがワークショップ開催時の振る舞いにもあらわれた。今後は、様々な人と一緒に「新しい価値をつくる」という意識の醸成と、キンビコミュニケーターの目指す姿や役割をより明確にするため、養成講座の内容や構成を再検討する。

(2) 地域との協働アートプロジェクト「みんなのキンビ展」

【多様な主体、市民との協働による美術展、ワークショップの開催】

[成果]

- 身近なテーマ設定と分かりやすい展示を工夫することで、より幅広い年代や障害のある方にも来館していただくことができた。
- 県内外の様々な企業や団体、学校、個人等との連携により当館単独では困難な、幅広い内容の展示やワークショップを実施することができた。
- アンケートによれば、半券提示で何度でも入場できる取組は好評であった。
- 前年同時期の展覧会に比べ２倍以上の来場者があった。会期中のワークショップには、年少者や高齢者、障害者の参加も多く、セカンドスクール的利用は前年度比258%である。

[課題と方向性]

- 来年度は、多様な人が「つながる」ことをテーマに、「いっしょにつくる」という視点をより大切にしながら、アートを通した対話の機会や多様な人が出会い、学び合える機会の創出に取り組む。

【障害者のアクセシビリティ向上に向けた取組】

[成果]

- 鑑賞支援ツール「さわってみる絵」を用いてワークショップを実施できた。鑑賞支援ツールがあったことで、見える人、見えにくい人、見えない人、より多くの人が関わって鑑賞することができた。

[課題と方向性]

- 「さわってみる絵」の作成やそれらを活用した鑑賞プログラムについて、題材となる作品を選定する段階から、視覚障害者や教員、企業関係者等が参画することで、方向合わせを行い、より多角的な視点を共有したい。
- 対象を幼児や高齢者などにも拡げ、様々な現場で展開できるプログラムの開発をしたい。また、「さわってみる絵」の活用の場を拡充するとともに、障害の有無を問わず鑑賞の機会を得ることができるユニバーサルな鑑賞方法についてみんなで考える機会を増やしていく。

【郷土の自然・食、文化芸術を切り口とした交流の創出】

[成果]

- 今年度は「大根」という身近なモノに焦点を当て、美術や文化、食など多様な視点で展観することで、観覧者の興味関心を喚起できた。
- 多彩なワークショップを展開し、展示テーマの捉え方や表現のあり方等について、互いに対話を重ねながら鑑賞する機会を多く創出できた。

[課題と方向性]

- 今後は、県内各地の地場産業や学校等とネットワークを結び、ワークショップや体験プログラム通じて、それぞれの地域がもつ歴史や産業に対する理解を深める機会を創出していく。

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会設置要綱

（名称）
第1条　この会は、「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会（以下「委員会」という。）と称する。

（目的）
第2条　委員会は、「みんなのキンビ」プロジェクト」（以下「みんなのキンビ」という。）の実施運営を行い、美術館を核とした多様な主体との協働による地域課題の解決を図ることを目的とする。

（委員会の事業）
第3条 委員会は、次の事業を行う。
（1）「みんなのキンビ」の実行に必要な企画及びその実施に関すること。
（2）「みんなのキンビ」の運営に必要な資金についての計画及び調達に関すること。
（3）その他「みんなのキンビ」の実行に必要な業務。

（委員会の構成等）
第4条　秋田県立近代美術館 館長 佐藤 哉子（以下「甲」という。）とNPO法人アーツセンターあきた 理事長 藤　浩志（以下「乙」という。）は、第1条の委員会に委員を派遣する。

2　委員会は、別表の職にあるものにより構成する。
3　会長は、委員会を代表し、業務を統括する。
4　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときはその職務を代行する。
5　会計については、委員会の事務を統括し、出納の責任者とする。
6　監事は、委員会の会計を監査し、収支決算を監査する。
7　人事異動等により構成員に変更があった場合は、後任の職務のものが任にあたる。

（構成員の任期）
第5条　任期は、委員会発足の日から事業が完了する日までとする。

（会議の招集）
第6条　会議は、必要に応じ会長が招集する。

（権能）
第7条　会議は、次の各号に掲げる事項を審議する。
（1）委員会の目的を達成するための基本的事項
（2）予算及び決算に関する事項
（3）委員会の規約に関する事項
（4）その他委員会の運営に関する重要な事項

（専決）
第8条　会長は、予算の補正その他緊急を要する事項について委員を招集し会議を開くことができないと認めるときは、これを専決することができる。
2　会長は、前項の規定により専決した事項について次の会議にこれを報告しなければならない。

（事務局）
第9条　委員会の事務を処理するため、甲に事務局をおく。
2　本会運営に関する急務が生じたときは、事務局団体がこれに当たる。

（事務局の設置期間）
第10条　設置期間は、委員会発足の日から事業が完了する日までとする。

（収入）
第11条　「みんなのキンビ」の開催に関する次の収入は、委員会の収入とする。
（1）「Innovate MUSEUM事業」補助金

（支出）
第12条　「みんなのキンビ」の実行に関する次の支出は、委員会の負担とする。
（1）「みんなのキンビ」研究会等の旅費及び謝金
（2）「みんなのキンビ展」及び協働企画ワークショップ企画委託費
（3）鑑賞支援ツール作成材料費
（4）記録映像作品製作費
（5）その他実行に必要な経費

（金銭の管理簿）
第13条　委員会は、第11条に規定する委員会の収入を適切な金融機関に預け入れのうえ保管し、第12条に規定する支出を行う。

（決算報告及び会計監査）
第14条　収支決算報告等は、会期終了後に推定預金利息で決算し、会計監査を受けるものとする。

第15条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、会計が別に定める。

附　則
（施行年月日）
この要綱は、令和5年6月10日から施行する。

別表

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会の構成員

(1)	会長	佐藤　哉子	(秋田県立近代美術館・館長)
(2)	副会長	藤　浩志	(NPO法人アーツセンターあきた・理事長)
(3)	役員	中田　善英	(秋田県教育庁生涯学習課・課長)
		安藤　郁子	(NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事)
		内田　富士夫	(秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部　部長)
(4)	実行委員	綾田　アデルジャン	(秋田県産業技術センター　電子光応用開発部・主任研究員)
		瀬川　侑	(秋田県産業技術センター　先進プロセス開発部・研究員)
		佐藤　美幸	(秋田県立栗田支援学校・教諭)
		田口　朋美	(秋田県立横手清陵学院高等学校・教諭)
		岸上　恭史	(秋田公立美術大学附属高等学院・教諭)
(5)	事務局	木村　雅洋	(秋田県立近代美術館・学芸班長(兼)学芸主事)
		保泉　充	(秋田県立近代美術館・主査(兼)学芸主事)
		北島　珠水	(秋田県立近代美術館・学芸主事)
	会計	福田　裕奈	(秋田県立近代美術館・主任)
(6)	監事	佐々木　和志	(秋田県立近代美術館・副主幹(兼)総務班長)
(7)	オブザーバー	森川　勝栄	(秋田県教育庁生涯学習課・主任学芸主事)

あとがき

令和4年4月の改正博物館法施工によって、美術館や博物館には、社会包摂につながる多様な地域課題に貢献するという役割が新たに求められるようになりました。このような社会的な要請を踏まえ、秋田県立近代美術館では、年齢や障害の有無等にかかわらず、すべての人に文化的な価値を届けること、そして次世代の子どもたちを育成する場として、また多様な人の出会いの場として、その中核的役割を果たすため、「みんなのキンビ」プロジェクトを立ち上げました。文化庁の「Innovate MUSEUM事業」として採択されたことで、計画していた取組のほとんどを実施できました。3か年計画の１年目となる今年度は、「みんなのキンビネットワーク構築事業」として「みんなのキンビ研究会」の実施と「キンビコミュニケーター」の養成、「地域との協働アートプロジェクト　みんなのキンビ展」として特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」を開催できました。本プロジェクトに参画いただいた方、各種催しに参加いただいた方、関わったすべての方にお礼申し上げます。

令和5年度は、「『みんなのキンビ』とは？」「『みんなに開かれた美術館』とは？」という問いを立て、それらをめぐり、様々な取組を行いました。中でも、その成果展示である特別展「からだじゅう で あじわう　大根ビネーション展」は、「からだじゅうであじわう」をテーマに県内在住作家をはじめ、障害のある方、デザイン会社、映像制作会社、高等学校や特別支援学校の生徒など、立場や世代を超えた地域のたくさんの方々と「みんな」でつくりあげた展覧会となりました。このことにより、訪れた方には、作品への思いはもとより、美術や表現することへのそれぞれの思いに触れ、考え、気づきにつながりました。同時に、作品の見方や感じ方、「あじわいかた」も人それぞれであり、多様な「あじわいかた」を共有できれば、作品の見方や感じ方には幅や奥行きがさらに生まれることを共感できました。会期中には8回のワークショップを実施し、幅広い年齢の方や障害のある方から参加いただきました。どのワークショップも、はじめはぎこちない「出会い」からスタートするのですが、展示作品などを通して言葉を交わしたり、一緒に体を動かしたり、互いの思いに触れたりすることで、場はどんどんと温まり、年齢や経験、背景の違いなどを超えて次第に一体感に包まれていく様子をみなさんで感じることができた時間となりました。

これらの取組を通して、少しずつではありますが、人と作品、人と人とをつなぐ美術館のあり方が見え、その可能性がひらかれつつあると実感しています。

近年、芸術を楽しむことと、健康寿命が延びることや、ウェルビーイングの向上との関係性が注目されています。高齢化や人口減少が進み、地域や家庭といった生活基盤や、人と人とのつながりが弱まっているといわれる現代にこそ、美術館が核となり、新たな役割に対応することが求められています。本プロジェクトにおいて、秋田県立近代美術館がつなぎ手となって、美術を通して年齢や障害の有無等にかかわらず、誰もが参加でき対話が生まれる場や、感じ方の違いを共有し、互いを理解しながら、つながりを生むような場の創出を目指してまいります。そして何より、誰にとっても居心地のいい「みんなのキンビ」を目指して、これからも多様な主体や地域、人とつなぐ取組を進めていきたいと思います。

「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会
事務局（秋田県立近代美術館・学芸主事）　北島　珠水

【謝辞】
本事業の実施にあたり、たくさんの皆様からご協力を賜りました。
ここに感謝の意を表します。

本事業は3カ年計画となっております。次年度以降の取り組みにつきましても当館ホームページで引き続きご覧ください。

令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）
「みんなのキンビ」プロジェクト　令和5年度　実施報告書

［企画・制作］秋田県立近代美術館・学芸班　北島珠水、保泉 充、木村雅洋
［ デザイン ］秋田県立近代美術館・学芸班　菅原 希
［印刷・製本］株式会社グラフィック
［発　　行］令和6年2月
［発　行　者］「みんなのキンビ」プロジェクト実行委員会
〒013-0064 秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62-46
秋田県立近代美術館内 TEL. 0182-33-8855　FAX. 0182-33-8858

無断転載厳禁